

# 核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会

No.57  
会報

富山市桜橋通り6-13  
TEL 076-442-8000  
世話人代表 金井 英子

## 2022年映画上映と被爆者の講演のつどい



チェルノブイリ原子力発電所事故から28年。  
子どもたちを守るために力を尽くすウクライナから、  
私たちは何を学べるのか。

### チェルノブイリ 28年目の子どもたち

低線量長期被曝の現場から 製作: OurPlanet-TV (2014年/43分/DVD)  
助成: ソーシャル・ジャスティス基金



(2014年公開)

とき

**8月11日(木・祝)**  
14:00～16:00

ところ

**富山電気ビル** 5階中ホール

富山市桜橋通り3-1 TEL:076-432-4111

**参加無料**  
オンラインでも  
参加できます

**14:10～15:00 映画上映**

1986年に発生したチェルノブイリ原発事故から28年が経過した2014年の現地を、インターネットメディアであるOurPlanet-TVの白石草さんが取材したドキュメンタリー映画です。多くの子どもたちが白血病やがんなど様々な疾患で苦しんでいたウクライナでは、学校と医療機関の連携や定期的な保養など、国・自治体による多様な取り組みが行われていました。

いま隣国ロシアの侵略を受けるウクライナ。日本はチェルノブイリの経験をどう活かすべきか。ご参加のみなさんと一緒に考えたいと思います。

**15:05～16:00 講演**

### この腕の中で いとは息絶えた

日本原水爆被害者団体協議会  
お話しする人 (日本被団協) 事務局次長

**児玉 三智子 さん**

(こだま みちこ)

1938年広島市に生まれ、7歳で被爆。1985年に千葉県市川市で原爆被爆者の会理事に就任して以来、被爆者運動に打ち込む。現在千葉県被団協会長で、2010年から日本被団協事務局次長。2005年、2010年、2015年の核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議に参加。多くの市民に被爆体験を証言し核兵器廃絶を訴えてきた。



※児玉さんはリモート(遠隔地)で講演されます

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

**第17回 定期総会**のお知らせ

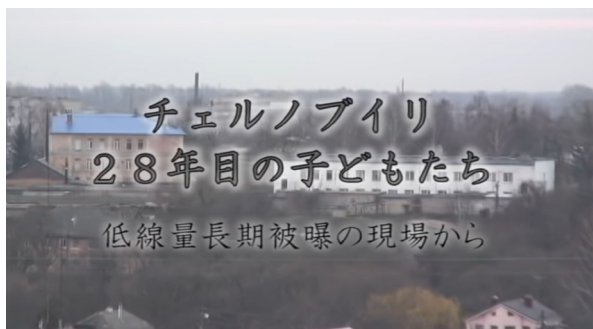
日時 8月11日(木・祝) 16:10～16:40

※映画と講演のつどい終了後

会場 富山電気ビル 4階 3号室

■主催 核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

■後援 富山県被爆者協議会、富山県被爆2世・3世の会、  
富山県保険医協会

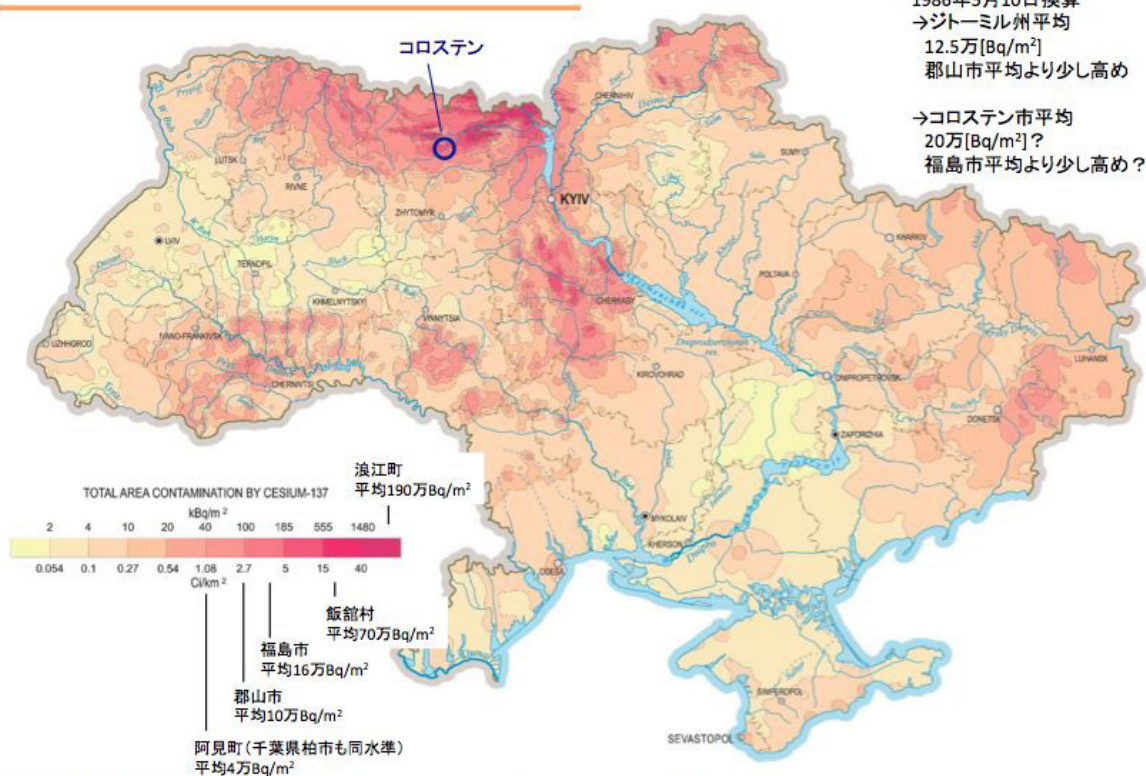


チェルノブイリ事故後28年経つウクライナへ足を運び、子どもたちの健康状態や学校生活などを取材した。汚染地域の子どもの罹患率が今も上昇する中、医師、教師たちの懸命な努力が続けられている。日本はここから何を学べるか。

子どもを取り巻く学校や教育関係者、医療従事者、保護者たちの取り組みや思いを取材した映像記録。

(OurPlanet-TVのHPより)

## 2 事故直後のCs137による比較



※文科省による土壌調査の平均値 (2011年6月6日～7月8日)との比較

図はウクライナ政府(緊急事態省)報告書『チェルノブイリ事故から25年 "Safety for the Future"』  
<http://www.inaco.co.jp/isaac/shiryo/genoatsu/chornobyl25eng.pdf> から抜粋

### 制作者に聞く

被曝による次世代への影響を主張することは差別を生みませんか？

白石草 (しらいし・はじめ)

ウクライナの取材で最も強く感じたのは、次世代への大きな影響でした。しかし、そのことを伝えることは、原発事故によって被曝した若い世代に不安を与える恐れがあり、このビデオを制作するにあたって最も悩みました(東日本の広範な地域が汚染されていて、影響は個人差が大きいと思います)。しかし、放射能によってリプロダクティブヘルスが脅かされている現実から目をそらさず、少しでも被曝を防ぐために努力することが大切だと考えビデオに盛り込みました。

「鼻血」もそうですが、被曝影響について言及すると、「風評被害だ」「差別だ」と躍起になる人たちがいます。一方「奇形児」の写真を掲げることで、被害の恐ろしさを主張する人もいます。私はハンディキャップのある子どもを育てていますが、この両方に大きな違和感があります。これらの言動はともに、女性が子どもを産めないことや障害のある子を産むことが「不幸である」との認識にたっており、病気や障害を負っている人や女性への「差別」を前提にしています。

被害を認識して被曝の影響を減らす努力をすること、被害者への差別をなくすことを両立させることが重要ではないでしょうか。被害者の口を封じることなく、声をあげられる環境を作ることによって、この問題をきちんと解決していくことが大切だと考えています。

## 『記憶を受け継ぐ』 児玉三智子さん (中国新聞より)

### 腕の中でいとこをみとる

児玉三智子さん(84)は7歳で被爆し、いとこを失いました。「これは昔話ではありません。あなたたちが被害者になるかもしれない」。全国的な被爆者の組織である日本被団協の事務局次長を務めながら、77年間の被爆者の苦しみを若い人たちに伝えていきます。広島と千葉をオンラインで結び、体験を聞きました。(取材：湯浅梨奈)



1945年当時は本川国民学校(現広島市中区、本川小)の2年生。学校の近くにあった自宅は、空襲に備えて防火帯の空き地を広げる「建物疎開」の対象になり、7月ごろ高須(現西区)へ移りました。



8月6日の朝、転校先の古田国民学校(現古田小)の教室で窓際の席にいとこがいて、突然閃光が襲いかかり、とっさに机の下に潜りました。左半身の肩から背中にかけて、ガラス片を浴びました。爆心地から4キロ。先生が包帯代わりにカーテンを引き裂いて、手当てをしてくれました。

父に背負われて学校から帰る途中、市街地方面から逃げてきた人とすれ違いました。真っ黒な赤ちゃんを抱いて這うように進む女性。「水をください」と父の足にしがみつくと人。顔半分と体を焼かれた少女は、助けて、と目で訴えてくるのです。振り返るとすでに倒れていました。

爆心地から約3.5キロの自宅は、屋根が爆風で壊れてしまいました。壁やたんすに黒い筋が付いていました。放射性降下物を含む「黒い雨」です。それでも、焼け出された親戚が自宅に身を寄せてきました。

建物疎開作業で被爆した、いとこのお姉ちゃん＝当時(14)＝のことは忘れられません。玄関で物音がして行ってみると、体中が焼けてほとんど裸の人が立っています。「みっちゃん」と掛けられた声で、いとこだと初めて気付きました。

体からしみ出すうみを拭き、傷口のうじ虫を取りました。3日目の朝、「水…」と言われました。体を抱きかかえ、水を含ませた手ぬぐいを口元で絞ると、のみ込む力はなく、水滴が口の周りを伝いました。そのまま腕の中で息絶えました。

いとこのお兄ちゃん＝当時(10)＝の傷は軽く見えたが、いつも下痢をし、時折鼻と口から血を流していました。9月初旬のことです。突然、血の塊を吐いて倒れ込み、その場で亡くなりました。恐ろしくなり、母からしばらく離れられませんでした。

爆心地からすぐの本川地区一帯は、壊滅しました。もし前月に引っ越ししていなければ…。命を奪われた多くの友達を思い、「自分は生きていていいのか」と苦しみました。

戦後は差別に直面しました。被爆者だからと就職活動で不採用になり、交際相手の親戚から反対されて結婚を断られました。心を閉ざした末の転機は、友人の紹介で夫となる男性と出会ったことです。夫の仕事の関係で千葉県に移り、不安を抱えながらも2人の娘を産み育てました。

次女は特に明るく活発でした。しかしがんの診断を受け、その4カ月後の2011年2月に45歳で亡くなりました。自分が被爆者だからなのか、と苦しみました。

「こんな思いを誰にもさせてはならない」と約40年前に体験を語る決意をし、活動を続けています。今、ロシアが核兵器を使うと脅しています。絶対に使わせてはいけません。自分の大切な人が核被害を受けないためには何ができると思いますか。一緒に一歩を踏み出しましょう。

「記憶を受け継ぐ」というタイトルは、中国新聞が公募した中高生たちが、被爆者と会って体験を直接聞く取材を行い、月1回連載している記事です。本記事は2022年4月4日掲載分のものでした。

オンライン参加も OK

第32回

## 反核医師のつどい

非核「神戸方式」を世界へ

in 兵庫

主催：核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい実行委員会

2022年9.24・25

## 1日目 (9/24 土)

- 14:30 ~ 全体会
- 14:40 ~ **ウクライナ危機から見る「核抑止力論」と「NPT体制」の問題点**  
—今こそ核兵器禁止条約を全世界に—  
講師：スージー・スナイダー 氏  
報告：松井和夫 氏（近畿反核医師懇談会「核兵器に投融資をするな」キャンペーン"DBOB"事務局長）
- 16:50 ~ **「核共有」「核武装」「憲法9条改憲」で日本を守ることができるのか**  
—非現実的な「現実主義者」たちの主張—  
講師：安齋育郎 氏（立命館大学名誉教授）
- 18:00 ~ **非核「神戸方式」を全世界に**  
講師：梶本修史 氏（兵庫県原水協事務局長）
- 19:00 ~ 懇親会

会場 兵庫県保険医協会 会議室  
元町駅から南へ徒歩10分 神戸フコク生命海岸通りビル5F

スージー・スナイダー氏

婦人国際平和自由連盟元事務局長。2017年にノーベル平和賞を受賞したICANの中心メンバー。2016年、「Nuclear Free Future Award」を受賞。



安齋育郎 氏

立命館大学名誉教授。1995年4月～2008年3月、立命館大学国際平和ミュージアム館長、2011年4月に開館した安齋科学・平和事務所所長。国境なき手品師団名誉会員。

## 2日目 (9/25 日)

- 9:00 ~ シンポジウム  
**「東日本大震災～福島第一原発事故とその後」**  
コーディネーター：郷地秀夫 氏（核戦争を防止する兵庫県医師の会代表）  
パネリスト：齋藤紀 氏、小出裕章 氏、石田仁 氏、広川恵一 氏
- 12:40 ~ まとめの全体会
- 13:30 ~ オプション企画（非核「神戸方式」見学ツアー）

## 【参加費】

医師・歯科医師	5,000円
医療関係者	2,000円
医・歯学生	1,000円

参加申込は富山の反核医師の会事務局まで TEL:076-442-8000

## 会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費によって支えられています。活動の基盤となる財政を確保するため、今年度会費の納入をお願いします。

まだ入会されておられず、会の趣旨に賛同し入会を希望される先生は、メールまたはFAX、電話でご連絡ください。会費請求の書類をお送りします。

◇年会費 5,000円（毎年7月が期首）

◇振込方法 郵便振替

連絡先 mail : kakuhaizetu-toyama@doc-net.or.jp  
TEL : 076-442-8000 FAX : 076-442-3033

会員の先生に2022年度分（2022.7～2023.6）の会費請求書（郵便振替用紙）を同封しています

## 編集後記

- 先日、世話人会を開催した。
- 戦争や紛争における正義とは、それぞれの当事者の視点によって異なるものである。日本を焦土と化した先の戦争も、東アジアの利権をめぐる日本と欧米の対立の結果であるというのが定説だ。
- 一方で「日本の植民地解放の戦争は正しかった」と主張する勢力は依然としてあり、関連本の新聞広告を目にすることも多い。
- ロシアによるウクライナ侵攻も、欧米発の情報とそうでない側のそれとでは、受け取る側の「真実」と「正義」がだいぶ異なってくるようだ。
- 個々人のファクトチェックが大切だろう。その際は「自分の見たいものだけを見てしまう」ネット情報に頼りすぎないようにしたい。（S・M）